

児童・生徒の現状・課題

- ・明るく素直で仲がよいが、学習面において互いに高め合うことや粘り強さが弱い。
- ・自由度をある程度与えられて日々の生活を過ごしているが、そこに秩序が伴わず、「規律あつての自由」という好循環が生まれない。

**学び続ける力を育むための重点目標**

〇一斉学習で培った力をベースに、子どもたちが「選択(自己決定)」を繰り返しながら学びを進めることで自分の考えをもち、行動できるようにする。

**具体的な手だて①**

振り返る際の視点が明確になるように児童に提示する。その際、視点を複数の中から「選択」できるようにし、児童が主体的に振り返られるようにする。

具体的な手だて②

児童自ら選択できる場面を、どの教科のどの場面において設定できるかを、学力向上委員会から発信し、全教員で共通理解する。

具体的な手だて③

教師が、児童に与える選択肢の6つの視点を常に意識し、自身の授業に取り入れられるように、掲示物を用意し、いつでも見られるようにする。

**児童生徒調査**

肯定的回答の割合(%)	昨年度	目標(6月)	結果(1月)
①自分から進んで計画を立てて学習している。	77%	80%	
⑦学び方を自分で選び、学習をすすめる。	82.5%	85%	

教員調査

肯定的回答の割合(%)	昨年度	目標(6月)	結果(1月)
①授業では、学習課題や学習過程等、児童が学び方を選択する場面を設定している。	87.5%	90%	
⑦児童が学び方を選択する場面を設定している。	76.8%	80%	

校内で共有し、授業改革を日常化するための工夫

- ・自己申告に伴う授業観察の際は指導案を教員にも配布し授業を互いに見合う機会をつくる。
- ・指導案の中に、どこに児童の選択(自己決定)の場面が設定されているかがわかるように明記し、取組内容を評価してもらう。

総括(6月)

全国学力学習状況調査や東京ベーシックドリルの分析の結果から、依然、基礎基本の定着度の低さが窺える。本校では、単純な反復や教え込みの学習形態でこの状況を打破するのではなく、児童に選択の機会を意図的に与える学習で内発的動機付けを高め、自己決定感や有能感を満たし、児童が自ら学び、深く理解し、思考する力を育むことが大切であると確認した。すぐに効果が出ることを期待するのではなく、長期的な視点で学力向上に繋げることを目指して、選択の場面を多く設定することを授業改革の芯に据えた。

総括(1月)